小さいお話

香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さいお話

【Ｎコード】
Ｎ４３９２Ｙ

【作者名】
香夜

【あらすじ】
黒崎　一護に関する小ネタ集。お話未満の小さい思いつきを載せて行きます。ここから話を作ることもあるかも？
設定なんかも置くかもです。

ポッキーの日

～双子の場合～

「お兄ちゃ～ん」

「一兄～」

「ん～？　どうし……」

ずいっ

「「どっひとすう（どっちとする）？？」」

→ポッキーをくわえた二人ににじり寄られる。

「……？」

→一護、困惑。

二人が一護を取り合ってたらいい。それで一護は困ってたら更にいい。

結局二人のをいっぺんにくわえてたらおいしい（^～^）

※これより先は『王様ゲーム的な何かをしててこうなった』という設定で。

～たつきの場合～

「……」ボリボリ
「……」ボリボリ
→お互い冷静。

周り『……』

ポキンッ
→ある程度食べたら折る。

『……（おもしろくねぇ！）』

全く動じない二人が見たい。

～織姫の場合～

「……（どどどどどうしようどうしようどうしよう！　かかか顔が近いよぉお！！）」
「……（どうすっかなぁこれ……井上、固まっちまってるし……そんなに嫌か）」

『（がんばれ織姫（井上さん）！！）』

想い人を目の前にして動けなくなった織姫と、たつき以外の女の子相手だと動かない一護。

一護←織姫の図式が好きです。

ポッキーの日（後書き）

……やっちゃった☆

後悔はしていない。

男性陣相手もいつかやりたい。

あなたに再び会うためならば（前書き）

暗いです。
ルキア視点です。

あなたに再び会うためならば

ゴポッ
ビチャビチャビチャビチャ……

口から吐き出された血が、地面に真っ赤な水溜まりを作る。

「……」
（死ぬのか、わたしは）

特に感慨を抱くワケでもなく、冷静にそう思った。

ひどい混戦だった。
いつか石田が撒き餌を使った時と同程度――否、それ以上の数の虚が、空座町に現れたのだ。
隊長格がいるとは言え、現世の戦力だけでは間に合わず、応援を呼んだが……

（それよりも先に、わたしは死ぬのだろうな）

悲観的になっている訳ではない。現状から予測される事実だ。
虚に喰われるのが先か、力尽きるのが先か――
違いがあるとすれば、そのくらいだろう。

「……」

自分が死んだら、あの少年は泣くのだろうか

ふと、そんな考えが回転の鈍くなりつつある頭を過ぎった。

普段は何かと言い合う仲だが、盛大に泣くだろうし、悲しむだろう。
別に自惚れている訳ではない。
彼は、そういう男だ。
特に、今回の戦いが始まった時に彼は自分の一番近くにいた。

『近くにいたのに、護れなかった』

そう言って泣く彼が容易に想像出来た。

「……」
（生きたい）

まだ生きたい。やり残したこと、未練も山ほどある。

（死にたくない）

兄様ともっとお話したい

（嫌だ）

恋次と甘味談議を交わしたい

（いやだ）

井上と現世の可愛いものや服を買いに行きたい

（イヤだ）

そして何より――

（いやだイヤだいヤだイヤダ嫌だ嫌ダァアアァァ！！）

死にたくない。
生きたい。

そのためならば……

そっと手を伸ばす。
消える直前の虚に向かって。

例え虚になったとしても
わたしは――

まだ生きたい。やり残したこと、未練も山ほどある。
そして何より――

一護に泣き顔なんてさせたくないから。

これはこれで、彼を悲しませる選択なのだろう。
それでも、泣いて泣いて、声が擦り切れるほど、目玉が溶けるほど

泣くだろう彼を思えば。
無惨な死に様を晒すよりかは、よほど。

あなたに再び会うためならば（後書き）

一↑ルキです。
すいません一回バッドエンドフラグ書きたかったんです。

ちょう暗い……
こっちのお話はすっごい暗い話がいっぱい来るかも？
例えば私、長編の構想を練ると、たつきと一護とが絡む話は一護がヤンデレ化します。

「足の一本二本もげば、どこにも行かないのかよ！」
「頼むから……お前だけは死なせたく無いんだ……だから……閉じ込めさせて？」
「俺だけ見てくれない眼なら……えぐっていい？」

等など。
そんなのの一場面がこっちに来るかもです。
軽いお話がいいという方は前書きを読んでお戻り下さい。

感想お待ちしております。

青の祓魔師　×　ＢＬＥＡＣＨ

一護：

二千年くらい生きてる。一応人間から生まれた人間。
生まれた時はから『力』が強すぎて疎まれてきた。
両親や家族は愛してくれていたが、だからこそ迷惑はかけられないと旅に。
重霊地っぽい森を見つけて、ここなら自分の『力』の影響を受けないと思い、住む。
傷ついた生き物（悪魔含む）を受け入れている内に更に強く、人間離れしていった。
死にかけていたコンを助け、主従に。
人間からは土地神扱い。実際、一護のおかげで害意ある悪魔は近づけない。なので悪いことはあまり起こらない。
自分の『力』を好いていない。祓魔師等の者の中でも、理解のありそうな者を招き入れて封印を施してもらう。

あまり怒らない。
優しい（特に、小さいモノ・弱いモノ）。ただし怒ると怖い。
興味のあることに関しては別だが、基本的には受け身。自分からはあまり話し掛けない。

顔の部分は『封』という字の書かれた布で覆われている。
黒い着物を着ている（死白装と同じ）。
『力』を封じるための装飾品をたくさん付けている。
１８１ｃｍ　６６ｋｇ

～使い魔になってから～

『最後の月牙天衝』を会得した直後くらいの髪を後ろでくくる。
１７４ｃｍ　６１ｋｇ
昔自分で編み出した『鬼道』を操る。
『無月』状態がスタンダード。

粗筋：

ある山に、地元で”神聖”とされる森があり、昔は供え物が山と積まれていた。
だが最近は人があまり寄り付かなくなり、遂には森を壊してゴルフ場を作る計画が。
一護は諦めたが、他のもの達は大激怒。工事の邪魔をするようになる。この時点では弱い奴らだけが暴れてる。
そこへ、雪男率いる祓魔塾生が実地訓練を兼ねて研修に。この時に初めてそこそこの奴らが出てくる。
一旦森を出ようにも『何か』に邪魔させて出られない。
おまけに悪魔からの攻撃でみんなバラバラに散ってしまう。
勝呂が困っていると、一護が現れる。
警戒していたが、再度襲ってきた悪魔から守ってくれたので、少し信用する。
何だかんだあって、事件解決。
「これからどうするか」と言われて困る一護。
そこで唐突にメフィスト登場。
「使い魔になるならば、居場所をあげましょう」と言われる。
主人に勝呂を選ぶ。コンに大反対されるが、黙らせる。

『契約』により大幅にパワーダウン。勝呂が強くなれば力も戻るし、更には元よりも強くなるかも知れないと言う。
元が人間なので普通の人間にも見える。怪しまれないように人間っぽい格好をする。それで勝呂のクラスに入ってくる。
普段は普通の生徒として生活。勉強は、学校のも塾のも、最初は勝呂に教えてもらう。すぐに慣れて自分から勉強するようになる。

青の祓魔師　×　BLEACH（後書き）

書いちゃった……

最近青エク熱があっついんです……！

誰か……誰か、文才のある方……こんなお話書いて下さいいい……！！

→いないとは思いますが、『面白い、書いてみよう！』という方はぜひお願いします！！

誰よりも一番（前書き）

病み気味

狂一護？

誰よりも一番

「騙されていたよ、一護」
ルキアが口を開く。

「……え？」

「見損なったぜ、一護」
続いて恋次が罵る。

「ルキア……？　恋次……？
いきなり何言ってんだ……？」

動揺する一護。
それもそうだ、何の前置きも無しに蔑むように言葉を投げ掛けられては、誰だって面食らってしまうだろう。

「チャドっ
ったく、この二人どう思うよ？
いきなり変なこと言い出しやがってよぉ」
その動揺を押し隠して親友に問い掛ける。

「……っ」

バッと顔を背けられる。

「は、はは」

更に動揺する。
それを隠そうと笑うも、情けないほど声が震えてしまう。
「何だぁみんなして……新手のイジメかよ？　やり過ぎだって」
いくらなんでも不安になるぜ？
紡ぐ言葉も不安そうに揺れるのを自覚する。
「虚勢を張るなよ、黒崎」
良い意味で『ライバル』と言える石田が、苛立ったようにそんな台詞を吐く
「石、」
「見ていて腹が立つ」
「！！」
息が苦しい
なんで……なんで……
「一護」
「！！」
振り返る。
幼なじみのたつきがいる。
「たつき……っ！　たつきは……たつきだけは、俺の味方だろ……
……？」

「……」

ふいっと顔を背けられた。

今さっきの仲間達のどの言葉よりも、どんな対応よりも、たつきのその態度に何より傷ついた。

呆然とする一護に、背後から声が掛けられた。

「お兄ちゃん」

「一兄」

「……遊子、夏梨」

一護はホッとする。

この二人は俺の妹だ

何より誰より信じられる

精神的に傷ついていた一護はふらふらと二人に近づき、抱きしめようと――

バッ

「「触らないで」」

手を振り払われる。

「あたし達から」

「お母さんを奪ったくせに」

「「家族みたいな顔しないで」」

「……！！」

息が詰まる
呼吸が苦しい
誰か……誰か、助け――

ドン

いつの間にかじりじりと後退していた一護は、『何か』にぶつかった。

「親父……」

後ろにいたのは、一心だった。
しっかりと一護の肩を支えてくれている。
一護は一瞬怯えたが、一心は大きく温かな手で一護の肩を包んでくれていたし、何より彼は微笑んでいた。
なので一護はホッと息をつき、安心し――

かけたその時。

ググッ……

「かっ、はっ……！」

首を絞められた。
誰に？

――父親、一心に。
笑顔のままで。

――何で？　どうして？――

そう聞きたくて、一心の目を覗き込み――
固まった。
彼の瞳に、確かな怒りと悲しみを見て。

「お前が真咲を殺した」
「お前が罠に掛かったせいで」
「お前だけは」
「絶対に」
「許さない」
「お前が」
「真咲の代わりに」

「死ねば良かっんだ……！」

『母親殺し』

ガバッ
ハァッハァッハァ……

息が荒い。全力疾走でもした後のようだ。
手足が震えている。止めようにもコントロールが効かない。

頬が痒い。泣いていたようだ。

「……アハ」

ぽつり、零れた。

「アハハ、アハ、アハハハハハハッ！！」

一度零れたら、もう抑えられなかった。
今のは夢だ。日頃から恐れていることが、夢になって今夜自分の前に現れたのだ。

信用しろと

信じろと

頼れと

誰よりも言ってきた自分が、誰よりも信用することも信じることも頼ることも出来ずにいる！
知られて、嫌われ、軽蔑され、憎まれることを恐れている！

これが、笑わずいられるものか！！

「ハ、ハハハハハ、ハハ……」

笑いが収まってきた。
早く、何時もの『自分』に戻らなくては。

誰よりも信用され、信じられ、頼られる、

『俺』に……早く、

為らなくちゃ

誰よりも誰も信用しない信じない頼らない『黒崎一護』に

誰よりも一番（後書き）

感想……怖いですが、お待ちしております……

交渉（前書き）

設定：
たつきは男子空手部の主将から一護を引っ張り出してくるよう頼まれる。
希望は三千円。一応四千円まで用意有り。どうしてもダメなら自腹切って五千円。

上な感じです。
台詞と説明が主です。

交渉

「……ご、五千……」↑恐る恐る

「高い、三千」↑きっぱり

「ハアァァ？！　おま、ふざけんな！　俺ァ、五千でも安いんだっつの！！」↑チョイキレ気味

「こっちはそんなに出せないの、まけてよ」↑冷静

「……」↑落ち着く

「で？」

「……よ、四千なら……」

「三千」↑ドきっぱり

「……」

「……」

「……わかった」↑がっくり

→

一護が弱気の場合。

たつきには強く出られない一護とか萌える。一たつ好きとして。
ため息吐きまくりなんだけどやることはしっかりやる一護。そうじゃないとたつきから鉄拳制裁喰らうからね！　まあ意外と真面目な性格だからってのもあるんだろうけど。
たつきは空手部の主将以下から泣いて喜ばれるといい。
切羽詰まってたんだよ、きっと。
そして、『断る』という選択肢は最初から無い一護。おいしい。
それに周りは驚いたり悔しがったりする。

「一週間で日給五千」↑効果音『ドーン』

「ご……！　まけなさいよ」↑予想外に高くて動揺

「ああ？　さっきまでの会話聞いてなかったのか？　俺ァ、五千でも安いんだよ
お前相手だから安くしてやってんよ」

「……！」

「返事は？」↑余裕

「よ……四千なら……」↑悔しそうに

「ご・せ・ん」

「……わかったわよ」↑めちゃくちゃ悔しそうに

→

一護が強気な場合。

こっちのが原作的に正しい気がする。

でもこの後空手部主将と直接交渉して四千にしてあげる。

安くしてあげるのはどっちも変わらない。おいしい。

交渉（後書き）

gd gdですねすみません。

こんなんでも感想とか頂けたら嬉しいです。

マジで恋した何秒後（前書き）

一↑たつ話。

ベタ。

マジで恋した何秒後

「……黒さ……んが、好……でし……」
「……悪……けど、……考え……」

「……」

まーただよ。

開いた窓から風に乗って聞こえてくるのは、幼なじみが受けている告白の一部。

「懲りないよねぇ……」

断られることがほぼわかっている告白をする女子も、丁寧に断って好感を上げ、好意を持つ女子を無自覚に増やす幼なじみも。

「……」

何時もは一緒に帰ったりしないのだが、今日は親が遅いので彼の家で晩御飯をご馳走になるのだ。

待っている間暇なので、幼なじみの彼について考えてみる。

幼なじみは、密かにモテる。

第一印象だけなら、
派手な髪色
眉間のシワ

ガラの良いとは言い難い口調
等々……
女子に好意を持たれる要素は中々無い。

しかし、少し付き合うと……
意外な頭の良さ
ぶっきらぼうな優しさ
礼儀正しいところ
ｅｔｃ……
結構良い物件であることに気付くのだ。

だが……

「あいつ、見た目の割にそーいうことに潔癖っつーか、くそ真面目っつーか……とにかく、面倒くさいのよねぇ」

『興味が無い訳じゃねぇけど……』

好きでも何でもない相手と、試しに付き合うなんて出来ない

以前、そう言っていた。

「……」

あいつが誰かと付き合ったら、どんな風になるんだろう。

ふと、そんなことを考えた。

眉間のシワは無くなるんだろうか。
目尻を下げ、口元を緩め、微笑むのだろうか。

普段のぶっきらぼうな感じはなりを潜めて、甘い声で名前を――

『たつき』

……

ボンッ

頭が沸騰した。

――いや、そんな気がしただけだ。実際には人体は外的要因も無しに沸騰したりしない。

……なんて冷静に注釈を垂れている場合じゃなくて！

あ、あああああいつと、ナニ、あたし、そ、うぞう、して！

あああああああああああああああ

ヤバい。

ものすごくヤバい。

何であたしとあいつで想像してんの、あたしの脳みそ！

落ち着け。

これはあれだ。

暇過ぎた脳みそがファインプレーしちゃっただけだ。

だから落ち着けあたしの心臓……！

さっきからドクドクドクドクうっさいのよ！

一人悶えていると、

「おーい、帰ろーぜぇ……」

幼なじみの彼が戻ってきた。

ドクンッ

「早かったじゃん」

内心の動揺を押し隠し、声を掛ける。

……動揺？

否、そんなもの、してない。

今まで考えもしなかったことを考えたから、少し混乱しただけ。

「そーかぁ？　途中で泣かれたから宥めるのに時間掛かった気ぃするんだけど……」

「あちゃー大変だったわね」

大丈夫、何時も通り。

声は震えも上擦りもしてない。

……何時も、通り。

「にしてもあの子も断るかー……すっごいキレイなサラサラロングストレートだったじゃん」

「あー確かに手触り良さそうだった……」

幼なじみの物言いに、軽く吹き出す。

「手触りって……犬じゃないんだから……！」

「は？……いやいや、そんなつもりじゃ……」

相手に失礼だと思ったのか、慌てて弁解仕出す彼に更に笑いが込み上げる。

こいつも、普通だ。
あたし達は、何時も通りだ。
あたしが、ちょっとごちゃごちゃ考えちゃっただけ。
あたし達は――

「でも」

一通り弁解して気が済んだのか、彼は何でもないことの様に切り出してきた。

「俺はお前の髪の方が好きだけどな」
「は」

スルッ

髪に手を伸ばされた。
指通りを楽しむ様に、何度も。

「遊子や夏梨の髪も好きだけど、お前の髪が一番好きだな、俺」
「……！」

こいつは……！

赤くなった顔を机に伏せる。
鈍感な幼なじみは、心配そうに名前を呼んでくる。

彼は本当に『どの犬の手触りが好きか』くらいにごく軽く話してい

て。

……こちらの動揺なんて、まるで気付いていない。

ああ、認めよう。

あたしは、何時からかはわからないけど、

とっくに彼に恋していたと！

マジで恋した何秒後（後書き）

ベタな『幼なじみ恋物語』
偽物臭プンプン。

名前は何となく出しませんでした。
ど、どうでしょう……？（びくびく）

誤字・脱字がありましたら、ご指摘よろしくお願いします。
感想……「くれてやってもいい」という方がいらっしゃれば、送って下さい。
泣いて喜びます。

いい夫婦の日（前書き）

一＋たつ話。
みんなで何か作業してます。

いい夫婦の日

「アレ取って」
「はいよ……あ、そっちのそれ取ってくれ」
「ん」
「お前らさぁ……」
「「あ？」」
「ハモ……何でもないデス」
「あっそ。……あ、そういやアンタ、こないだ貸したやつ返しなさいよ」
「……あーアレなぁ。悪ぃ、まだ読んでねぇ」
「はぁ？　アンタ遅すぎ」
「そーいうお前こそ、先々週の、返せよ」
「うわごめん、まだ聴いてない」
「人のこと言えねぇじゃねぇか」
「だからごめんって」
「ったく……そういやお前、今日ウチ来るんだよな？」
「そうよーゴチになります」
「なんかリクエストあるか？　夕飯の」
「……鍋。モツ鍋。あったまりたい」
「ん、わかった。帰り買いもん付き合えよ？　部活ねぇんだし」
「リョーカイ」
「……お・ま・え・ら・なぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「うわ！！」
「なによ、デカイ声出して……」
「いい加減にしろっつの！　いくら今日だからって！！」
「「は？」」
「ハモるなぁぁぁぁ！！」
「今日って……」

「なんかあったっけ？　覚えてる？」
「……覚えてねぇな」
「お前らが無自覚なのはわかるけど！　ツーカーっぷりだとか、夕飯のリクエスト聞くとか、相手の予定知ってるとかぁ……！　うっうっうっ……」
「「……（なんか気持ち悪い）」」
「いくら今日が、

１１月２２（いい夫婦の日）

だからって、お前らの夫婦っぷりは独り身には寂しいんだよぉぉぉ……！！」
「「……あー……」」
「ナニそのどうでもよさげな感じ！」
「「どうでもいいし」」
「……うわぁ～ん！！　誰か、誰か俺の気持ちをわかってくれるやつはいｎ」
「うるさいんで黙ってもらえませんか？」
「敬語イヤー！！」

ｇｄｇｄ。
強制終了。

いい夫婦の日（後書き）

グダグダですみません。
書きたくなって授業の合間の一時間半でやっちゃいました（／／△／／）
また特に意味も無く名前を出さないでみました。
……どれだけ出来るか、ちょっと楽しくなってきました。
感想お待ちしております。

いい兄さんの日（前書き）

黒崎兄妹のお話です。

いい兄さんの日

ブォォ……

ドライヤーの音が夜の黒崎家のリビングに響く。

（……気持ちいいなぁ）

食器の片付けも宿題も終わっていて、後は髪を乾かせば寝るだけ。
そんな状況でこんな気持ち良さは、『眠れ』と言っているようなもの。
事実、段々と瞼が重く――

「コラ寝るな」
「あ、」

ドライヤーが止まってしまった。
いや、正確に言えば黒崎家の長男――一護が止めたのだ。

「うー……だぁってぇ、すっごい気持ちいいんだもん……」

不満そうに唸るのは、一護の妹――遊子だった。

「だからって寝るな。中学生のお前運ぶの、大変なんだぞ」
「……！　あ、あたし……太った？！」
「……あー、違う違う。『成長』したんだよ」
「……でもぉ、お兄ちゃんの言い方って傷つく！」
「えぇ……」

遊子と一護が軽くじゃれ合っていると、
「何してんの？」
一護のもう一人の妹――夏梨が風呂から上がってきた。
「お、上がったか」
「あ、夏梨ちゃん！　あのねーお兄ちゃんに髪乾かしてもらってたの！」
「……ふーん」
「えへへぇ……いいでしょぉ」
「別に」
自慢げな遊子とは裏腹に、夏梨はあくまでもクールだ。
（対照的だよなぁ、双子だってのに）
遊子はかなりわかりやすく甘えてくる。
夏梨は普段クールに振る舞っているせいか、甘えたい時に甘えるのが苦手だ。非常にわかり難い。
だが――
（……ん？）
夏梨はまだ髪を乾かしていない。
もちろんドライヤーは一護が持っているが、遊子の髪はもう乾いているので、一言『貸して』と言えば貸す。
仮にまだ使えないとしても、タオルで水分をある程度拭う等するだろう。夏梨は無駄を嫌う。
それにさっきからこっちをちらちらと見て――

（ああ）

全くこいつは……

「夏梨」

チョイチョイ、と手招きする。

訝しげな顔をしながらも素直に近づいてきた夏梨を――

ぐいっ

「う、わ！」

強引に自分の足の間に座らせた。

「ちょ、一兄！」

「んー？」

ブォォォ……

「『んー？』じゃないでしょ！　何すんのさ！」

「お前の髪乾かそうと思って」

「……！」

顔を赤くする夏梨に思わず笑いが浮かぶ。

ばれてないと思っていたのか。

「〜〜頼んでないっ！」

「そうだなー俺がやりたいだけ」

「〜〜〜〜！！」

更に赤くなる夏梨。

遊子はかなりわかりやすく甘えてくる。

夏梨は普段クールに振る舞っているせいか、甘えたい時に甘えるのが苦手だ。非常にわかり難い。

だが――一護にはわかる。

「お兄ちゃんひどい！　あたしの時は渋々だったのにぃ！」

「結局やったんだからいいじゃねぇか」

「良くない！！」

こうして。

遊子は一護に食ってかかり、夏梨は顔を真っ赤にしてされるがままという、珍しい黒崎兄妹の夜は更けていった――

いい兄さんの日（後書き）

１１月２３日は
『いい兄さんの日』
らしいです。

それに因んでやってみました？
どうも私は遊子を甘えたに、夏梨はツンデレにしたいらしいです。
（めちゃくちゃ楽しい　◎＾∇＾◎）

感想お待ちしております。

ＢＬＥＡＣＨ　×　青の祓魔師？

一心さん…騎士団に属さない（仏系？）祓魔師。幼い一護を悪魔から庇い、死亡。↑雨の日

真咲さん…一般人。悪魔のこととかは知ってた。一心さんの死により悪魔落ちする。そこを一護に斬られる。↑雨の日

一護…両親の死に関わったことがめちゃくちゃトラウマ。雨の日は情緒不安定になる。浦原さん達により『斬拳走鬼』は完璧に近い。

浦原一味（？）…剣術は浦原さん。白打は雨とジン太。瞬歩は夜一さん。鬼道はテッサイさんがそれぞれ一護を鍛える。

基本設定はこんなところ。

たつきちゃんと双子は絶対出したい！……けど。

両親の死後、黒崎兄妹は有沢家に居候。仲良し。学校も一緒。シスコンブラコンな黒崎兄妹。兄妹はたつきちゃん大好き。

にするか、

両親の死後、一護は浦原さん達と行方をくらます。双子は有沢家預かり。体育科の特待生として聖十字学園にたつきが来るまで音信不通に。

悩む。

一護の性格も、

自分からはあまり話かけないけど、人嫌いではない。仲良くなったら執着する。

か、

徹底的に人嫌い。話しかけると顔をしかめる。なまじ強い分勝呂も「ちゃんと連携せぇや！」とか言えない。足引っ張るから。

めっちゃ悩む＜（、△、；）＞

ＢＬＥＡＣＨ　×　青の祓魔師？（後書き）

この設定も、どなたか使いたい方は持っていってください

俺の『一つ』（前書き）

死ネタ。
暗いです。

俺の『一つ』

ザァァァァ……

雨が降っている。

『あの日』と同じように――

「……どうして」

小さな声で呟いたのは、一人の十代とおぼしき青年だった。

鮮やかな橙の髪をした彼は、二人の少女を抱えていた。

歳は同じくらい、髪色はそれぞれ黒と茶の、可愛らしい少女達だった。

「どうして」

二人は青年の妹だった。

「どうして」

大切な家族だった。

「どうして」

『死ぬまで守る』と誓った存在だった。

「ドウシテ」

その二人が、死んでいた。
冷たく、なっていた。

「どうして……！」

『一つのものを護り抜けるように』
そんな願いが込められた、俺の名前。
この二人は、俺の『護り抜くもの』だった。
それなのに――！

「う」

一つ、呻きが零れた。
零れ出したら、もう止まらなかった。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

雨は止まない。
まるで、青年の心を表すかの様に――

俺の『一つ』（後書き）

こっから一護が壊れる話とか、書きたい……！

私の中で、一護は周りに依存しているところがあると思っています。
中でも、特に家族とたつきには依存しちゃってると妄想。
『守っている』ことに依存。
無くしたら、堪えられない。

そんな私には、月島の能力は美味し過ぎました。

続くかも？

そう自分に言い聞かせた（前書き）

前の話の続き（？）です。

そう自分に言い聞かせた

「何故だ……」

吹き抜ける風の音が煩い中、呟く様に問い掛けるその声は、不思議とその場にいる者達の耳にはっきりと響いた。

「何故、この様なことを……！」

問うのは、黒髪の少女だった。
彼女の後ろには、複数の人影があった。
様々な髪・瞳の色であったが、一つ共通点があった。
皆が黒い着物――『死白装』を着た”死神”であること。

そして……黒髪の少女の前にいる青年もまた、着ていた。
ただし彼は――『代行』であったが。

青年は鮮やかな、太陽の様な橙の髪色を持っていた。
太陽の様な明るさ――は持っていなかった。
むしろ普段はローテンションで、目付きの悪さから周りを遠ざける様な人間だった。
だが、迷っている者、困っている者の道を照らす……そんな青年だった。

それなのに、今は。

「答えろ！　何故……大量虐殺などしたのだ！！」

大量の血に染まっていた（・・・・・・・・・・・・）。

その傍には、幾人もの死傷者が。彼は……俯いていた。
彼女の問い掛けにも、ぴくりとも動かない。
何故だ？
彼は確かにこの様なことが出来る実力を持っていたが……彼はその力を『護る』為に使ってきた。
その彼が何故、護るべき仲間に攻撃など……？
「なあ」
と。
俯いたままだった青年が、声を発した。
「い……！」
「お前らに、俺の名前の意味って、話したことあったっけ？」
少女の幼なじみの赤髪の男が青年の名を呼ぶより早く、彼は問い掛けた。
「お前の、名の意味……？」
注意深く聞き返したのは、銀髪の少年。
他の面々は、青年の質問の意図が分からず戸惑っていた。
そんな周囲を他所に、青年は語りだした。
「俺の名前は、『一つのものを護り抜ける様に』って付けられたんだ」
皆、納得した。

彼が何故『護る』ことにこだわる――否、『固執』と言ってもいい――のか。
だが、疑問が振り返す。
何故、この様なことを？

「俺は昔、『一つ』を護れなかった。」

――え……？
どういうことだ？
ほとんどの者が意味を掴めずにいる中、黒髪の少女だけは息を呑む。
まさか……！

「あの時、あいつらには随分悲しい想いをさせちまった……だから、あいつらは『死ぬまで護る』って誓ったんだ」

「でも、護れなかった」

「また、失った」

「『護る』ことの出来ない俺に、意味なんてないし――」

「『護るべき家族』がいない世界なんて、俺にとって……」

「存在する価値が、無い」

――！

死神達は、固まった。

言い終えたと同時にこちらに視線を向けた青年の顔を見て。
青年は、笑っていた。
張り付けた様な、歪な笑顔。
その瞳の奥には、狂気が見え隠れしていた。

「俺は」

ゆらり、と。
彼は刀を構える。

「お前らも、認めねぇぜ……？」

ざわっ

背筋に『恐怖』が走った。
歴戦の戦士である彼らが、戦い始めてそう年月の経っていない青年を――『畏れた』のだ。

そのことに何かを思うより、何か行動を起こすより早く、

「じゃあな」

彼らの世界は、黒く染まった。

最期に、泣かない彼の涙が見えた気がしたのは、きっと気のせいだろう。

そう自分に言い聞かせた（後書き）

タイトルの意味は、

殺したくないのに、殺さずにいられなかっただなんて、一護が可哀相過ぎるから

です。

注釈要る様なイミフな文章すみません……

感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4392y/

小さいお話

2011年11月27日17時47分発行